

8月18日9時30分 CRT スタジオで収録

読書の基本を考える

開倫塾

塾長 林明夫

Q：読書、本を読むときに大切なことは何ですか。

A：一番大切なことは、本は、じっくり、一語一語、どのような意味なのかを考えながら読むことです。



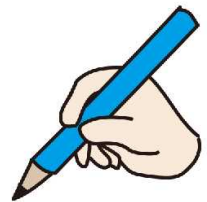
Q：エッ、本は、どんどん、速く読んだ方がよいではありませんか。

A：本を読む目的は何か、著者との時空を超えた対話を行い、著者の考え、物事の見方を知り、自分で考える力や思慮深さ、自分自身を振り返る力（自省心、省察力）を身につけるためです。そのためには、じっくり、一語一語、よく理解しながら読むことが大切と考えます。



Q：小説やエッセイも、一語一語、よく理解しながら読んだ方がよいのですか。

A：簡単な、時間つぶしのための読み物といわれる作品も、侮(あなど)ってはなりません。一語一語、ていねいに読むことをおすすめします。作者は、どのような作品であっても、命を削りながら、懸命に執筆しているからです。



Q：林さんは、どのように本を読むのですか。

A：(1) 本を読むときには、鉛筆やボールペンを片手に持ち、線をひいたり、語句を囲んだり、書き込みをしたりしながら読みます。

(2) 小説を読むときには、登場人物はすべて線で囲みながら、ゆっくり読みます。

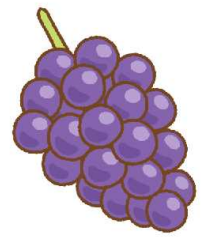
(3) 例えば、先日、悪戦苦闘しながらようやく読み終えた小説に、20世紀初頭のフランスの名作、ラディゲ作「ドルジェル伯の舞踏会」(岩波文庫)があります。小説の登場人物は、少ないのですが、心理描写が極めて精緻でした。そこで、人物名が出てくると、必ず線で囲みながら、場面場面の心理の理解に努めました。20歳で腸チフスで急逝したラディゲは、生前2つの作品しか残しませんでした。

(4) 18歳の時の最初の作品である「肉体の悪魔」(光文社古典新訳文庫)は、文章が極めて平易で、心理描写もわかりやすい表現が多いため、理解しやすかったです。しかし、遺作の「ドルジェル伯の舞踏会」の心理描写は極めて精緻でしたので、登場人物に印をつけながら、一語一語、読まざるを得ませんでした。



(5) この2つの作品は、20歳前の作品ですが、いずれもフランス文学が生んだ名作です。

(6) ただし、先日読んだ、有島武郎作「一房の葡萄、他四作（溺れかけた兄妹、碁石を呑んだ八ちゃん、僕の帽子のお話、火事とポチ）」は、童話の作品でしたので、線は引きませんでした。それでも、一語一語、理解しながら読みました。



(7) 同じく、有島武郎作「小さき者へ、生れ出づる悩み」（新潮文庫）は力強い文章で、読者に訴えるものが多く、一語一語、ないがしろにできない作品でした。いずれも名作です。

(8) 編集者がつけてくださる注釈は、必ず参照します。注釈を見ても意味や読み方がわからない語句は、印をつけておき、その場か、後で、辞書で調べ、その意味を本に書き写します。



(9) 年号が出てきたら、西暦に直して、文章の上を書いておきます。時々、「歴史年表」で確認をします。

(10) 一人の著者、作者の本が気に入ったら、その代表作を少しずつ読んでいきます。

例えば、先ほどのフランスの作家ラディゲは、20歳で急逝したため、2つの作品しか残していませんでした。続けて読み終え、とても深い感動を覚えました。

(11) イギリスを代表するウィリアム・シェイクスピアは、37作品を残したので、何か月かに1作品ずつ読み進めています。



夏目漱石の作品は中学生・高校生の頃から少しずつ読んでいますが、未だに全部読み終わっていません。

(12) 森鷗外の「渋江抽斎」などは、漢文の知識が不足しているため、いまだに手が出ません。

政治思想家、丸山眞男の作品、例えば、「近代日本政治思想史」（岩波書店）などは、ようやく今頃になって、字面、文字が追えるようになりました。

(13) 和辻哲郎の作品「日本倫理思想史」も、ようやく今頃になってという状況です。

○読みたくても、難しくて読めない作品は、背景となる知識が極端に不足している場合が大半です。焦らず、背景となる知識を学びながらコツコツ、一語一語読み進めることをおすすめします。

(14) 古典は、読みやすくわかりやすい、新しい現代語訳や翻訳がどんどん出ています。時々大きめの書店に行き、普段読み慣れている作家や著者の、新しい現代語訳や翻訳を探してみることも、おすすめです。



Q：本は何回読んだらよいのでしょうか。

A：(1) 同じ質問を、オマーンやネパール大使をなさっておられた、神長善次大使にお伺いしたことがあります。

(2) 神長大使は、「林君は、何回位読んでいるのかね」と逆に尋ねられたため、「2回か、多くても3回くらいですかね」と答えたら、「君、本を読むのなら、6回くらいかけて読む本を選んだらいいよ」というアドバイスをいただき、衝撃を受けたことがあります。

(3) 「大使は、今、どのような本を読んでおられるのですか」と、更に、お伺いしたところ、お手元にお持ちの、井筒俊彦著「意識と本質、精神的東洋を求めて」(岩波文庫)をご紹介くださいました。

(4) いつの日か、イスラム文化、インド文化、中国文化など東洋思想にも慣れ親しみ、大使にご紹介いただいた、井筒俊彦著「意識と本質」にも挑戦させていただきたく存じます。

(5) 本は、5～6回読む。5～6回読むに値する本を読む。私もそう考え、皆様にもおすすめいたします。

Q：最後にお聞きします。本はどのように選べばよいのでしょうか。

A：(1) 学校図書館、公共図書館、大学図書館、私設(クラブ)図書館など、様々な図書館をご自分の居場所(サードプレイス)にして、図書館にある本を読むことをおすすめします。

*ただし、図書館の本は公共物ですので、「書き込みは禁止」です。「器物損壊罪」に当たりますので、絶対にしないこと。

(2) また、時々、少し大きめの書店や少し大きめの古書店に出かけ、読むべき本を探す。

○自分の行きつけの書店(本屋さん)や古書店(古本屋さん)があることは、人生の喜びの一つです。



(3) 学校の各教科の教科書で紹介されている人物、著者、作者の本は、おすすめです。小学・中学・高校の好きな教科の教科書に出ている人物の作品を、一生かけて少しずつ読み進めると、精神的に充実した、素晴らしい人生が歩めます。

(4) 一番おすすめなのは、「高校倫理」の教科書に出ている内容を、一生かけて学び続けることです。

(5) 大学や短期大学、専門学校、専修学校、大学院で学んだ内容や、専門教科や一般教科で学んだ内容について、一生かけて、もう一歩進んだ読書に励むことも、超おすすめです。

(6) ですから、大切なことは、中学校・高校・大学・短期大学・専門学校・専修学校・大学院で学んだすべての「教科書」「辞書」「年表」「地図帳」などは、死ぬまで絶対捨てないこと、処分しないことです。



(7) 一度熱心に読んだ本も、絶対捨てないこと、処分しないことです。そして、繰り返し、同じ本を読み続けることです。

(8) 「一度学校で学んだ教科書や、一度熱心に読んだ本は、幸福の青い鳥、人生の宝物」です。

○では、がんばって!!